

第28期社会教育委員の会議

第9回定例会議事録

令和元年10月18日

【1】 開催日時

令和元年10月18日（金）18時30分～20時30分

【2】 開催場所

世田谷区役所第2庁舎3階 教育委員会室

【3】 出席委員

萩原委員（議長）、峯岸委員、神保委員

森岡委員、村上委員、権田委員、山崎委員、吉岡委員、湯澤委員

【4】 出席職員

教育委員会事務局

皆川生涯学習部長、田村生涯学習・地域学校連携課長

大井社会教育係課長補佐、御園生社会教育担当係長、橋本社会教育係主任

【5】 傍聴人

3名

【6】 次第

1 第8回議事録の承認

2 議事

（1）活動報告書素案の検討について

3 その他

（1）事業報告

○議長 それでは、定刻になりましたので、第9回社会教育委員の会議を開催したいと思います。

まずは第8回議事録案についてですが、これで承認ということによろしいでしょうか。

(異議なし)

○議長 ありがとうございます。では、この会議終了後、御署名をお願いいたします。

今日は、傍聴者が3名いらっしゃいます。世田谷区社会教育委員の会議傍聴規則に基づき入場していただきます。

(傍聴者入室)

○議長 では、議事の(1)活動報告書素案の検討に移りたいと思います。

まず、会議資料の2、活動報告書素案をごらんください。

第1章は、前期の報告書でまとめた提言を再録しています。これをベースに中長期のビジョンで子どもの貧困に対してこのような方向性で取り組むべきだろうということを図式化したものが4、5ページに載っています。第2章は、今期の第1回目から第3回目の議論の要点をまとめたものになっています。第3章は、公開ワークショップで出てきたさまざまなアイデアが資料として添付されています。第4章は、ワークショップを経ていろいろなアイデアが出てきたことをたたき台にしながら、さらに具体的な方策へと今日の議論も経て肉づけされていくという構成になっています。

何かお気づきの点とか、御提言、御意見はございますか。

○委員 第4章の市民主体と行政課題とある中で、「そこで、行政課題の1つとしてコントロールタワーの組織が必要だと思う」と出ていますが、コントロールタワーという言葉が違う言い回しに変えたほうがいいのではないかと思います。

○議長 社会教育の理念からすると住民主体で、行政は、住民の学びに対して支援する、サポートはするけれども、コントロールはしないというのが原則です。そう考えると、行政がコントロールタワーになるという表現は……。

○委員 コーディネーターと言いかえてもいいと思います。いろんな組織がばらばらにやっていることを1つにまとめていく組織が必要という意味で言ったので、意味としてはコーディネーターでいいと思います。

○議長 では、「行政課題の1つとしてコーディネートの機能が必要だと思う」とか、「行政という組織ですからコーディネートの機能が必要だと思う」「SOSで受け止めたものを解決できないものをどうつなげていくかで受け止めるのが、公としてのコーディネート

の役割である」と表現を変える。そこは非常に本質的なところだと思います。

○事務局 議長、よろしいでしょうか。同じく25ページの行政課題の下から2つ目にも「公はそれをコントロールや」とありますが、こちらはいかがいたしましょうか。

○議長 ここの御発言も委員からだったでしょうか。

○委員 コントロールをコーディネートと言いかえていただいていると思います。

○議長 では、コーディネートやバックアップをすると。次のコントロールは省略していいということですね。

○委員 28ページの一番下の右側ですけれども、インターネットの高校の具体名を出していますが、固有名詞は除いたほうが良いと思います。

○議長 そうですね。インターネットを活用した高校や通信制高校は本当に多くなっています。先日、通信制高校の教員の方のお話を聞いたら、前年から通信制高校業界としては1万人増えていると。必ずしも不登校の子とは限らず、積極的に進学を目指す高校も出てきていると言っていましたね。制服もある学校もあると言っていました。もう1つの選択肢になっているということです。では、ここはインターネットを活用した高校や通信制高校ですね。

ほかはいかがでしょう。

恐らく各章にリード文は必要ですよ。いきなり資料が来ている部分があるので、間をつなぐ肉づけは必要かもしれません。まとめの流れとしてはどうでしょうか。

○委員 27期で3つの課題が出て、これがだんだんと具体化されてはっきりしてくるという流れで私はとてもいいと思っています。ただ、かなり表現がオーバーラップしているところもあるので、初めて見る方は読みにくいかなというところもありますけれども、流れはいいと思います。

○議長 肝心の29ページ以降ですね。ここに骨太な提言の柱が来るといいと思うのですが。

あとは、今期から初めて委員になられた方もいらっしゃると思いますので、この報告書の位置づけについても御説明したほうが良いと思います。この報告書は私たちがここで議論をして、私たちからの提言ということで区の教育委員会に提出します。これを受けて区では、参考にしながらどういうふうにするかということを検討する。そのための大事な意見として提出されるという認識でよろしいですね。なので、私たちが提言したことが即全て実現されるというわけではないですが、ある意味、第三者の、そして区民の各団体の代表からの重要な意見として提起されるということになるわけです。この間、ワークショップ

プもしていますので、いろんな立場の方々にも来ていただいて、今回よかったのは20代、30代の方も結構参加されたということも特徴的だと思います。そういう声も拾いながら提言できるといいと思いますが、よろしいでしょうか。

それでは続いて、会議資料3をごらんください。

事前に私と事務局で前回の皆さんの御意見を整理させていただきました。恐らく皆さんが出してくださった案は幾つかの柱で整理できるということで、これはあくまで案ですから、別立ての柱を立てられそうであれば、また御意見をいただければと思います。

「市民主体の『共の世界』を豊かにするために、第三の大人を発掘し、ネットワークをつくることが重要であり、社会教育主事・社会教育指導員による仕掛けやコーディネートが必要である。前回のアイデアを元にさらに掘下げ、より具体的な方策を考える」というのが前回の課題でした。整理していくと大きく2つの柱があり、方策の柱1、つながれない子どものケアで、ネットをつなげる学習支援。これは学校に必ずしも行けない子どもたちへのケアです。子どもの貧困というのは、世田谷区では小学生は約11.5%、中学生が13.9%と生活実態調査で出たわけですがけれども、そのときに解説をされた首都大学東京の阿部彩先生のお話だと、この子たちは貧困で孤立しているわけではなく、内にリスクを抱えている、環境的にリスクを抱えやすいという意味で捉えてくださいと言っていました。経済的に貧困でなくても社会的孤立に陥る御家庭やお子さんがあるわけですし、逆に子どもの貧困層と言われている御家庭やお子さんであっても関係性が豊かに、前向きに頑張っているところもあるわけです。そういう意味では、ここの会議でも広くそういう経済的な指標だけで見ないで、関係性の貧困で見たときには、つながれない子どもたちへのケアというのは重要な柱ではないかと御提言いただいたと思います。

もう1つ、方策の柱2は、第三の大人・若者——ここに若者も入れました。皆さんの意見の中に若者の視点も入っていたので、リード文は「第三の大人を発掘し」と書いてありますが、ここに若者も加えて、第三の大人・若者の発掘と顔の見えるネットワークづくりというタイトルをつけて整理しました。これは、3つに分けていて、1つは、最も多く提言として出されたのがカフェです。学校カフェ、地域サロンの開催という提言が出されていました。カフェを拠点に、インフォーマルなつながりをどう創出するか、そういう意味では、カフェは気軽に立ち寄れて、フォーマルな形ではなく、緩やかにコミュニケーションがとれるような場の仕掛けとして、意見が出ていました。

もう1つは、講演会や養成講座やワークショップを積極的に開催する。これは第三の大

人や若者がまずは集ってみるきっかけとして有効ではないかと御意見が出たのを1つの柱にしてあります。若者対象のイベント開催とか、第三の若者（ユースサポーター）という形で発掘したらどうかと前回ご意見がありました。確かに小中学生には、世田谷は伝統的にはジュニアリーダーというのを養成してきた歴史がありますが、そういった少し年上のお兄さん、お姉さんが大人の間に入ってくると、動き方とか関係性が変わってくる。子どもたちが相談相手としてまずはお兄ちゃん、お姉ちゃんに聞いてみるみたいなことはあります。だから、若者が間に入るということはとても大事な視点として出しています。あとは地域ごとによる複数回のワークショップ、子育てを介したネットワークづくり、保護者がつながる企画の開催をバックアップ、コーディネートする役割として社会教育主事や社会教育指導員が担っていく。そこを意識して世田谷区社会教育事業を行ってくださいという提言になると思います。

まず、つながれない子どものケアが大事なところでありながら、もう少し具体的な方策を掘り下げる必要があります。

では、ネットでつながる学習支援に補足で何か御説明いただけることがあれば。

○委員 今年から世田谷区の中학생全員にIDを配付しています。インターネットのつながる環境でIDを入れると、小学校から中学校3年生までの、5教科の問題をやることができるという環境を整備していただいています。ただ、今年から始まったばかりで実際の稼働率が少ない。なぜ少ないのか、今後どうしなければいけないのかという検証も必要だと思います。まず、続かないというのが1つ。それから、案外家庭につながる機器がない。家庭にパソコンがある家庭は結構多いですけども、子どもたちにネットを使わせない、ネットを使えるようになっていないという家庭も結構あって、できないというのもあります。ただ、不登校の子も何人かですが活用しています。それを見ると、今後どういうふうに取り組むかによって可能性はあるのではないかと考えています。

○議長 世田谷区として仕組みは整備されて、基本的なことはできている。この会議からの提言としてはどういうことが考えられそうでしょうか。

○委員 子ども・若者応援団がやっている寺子屋みらい in 善宗寺というところがあって、応援団と書いてあるのは、教育の専門家と福祉の専門家が手をつなぎ、子ども・若者、親、教師を応援するということで、メインの方はソーシャルワーカーで、そこに退職された先生、ケースワーカーなどプロの方が入って、あとはボランティアの学生、地域でお手伝いをしたい方たちがつくっている団体です。週1回金曜日10時から20時半までの間に好きな

時間を選べて、小学生から高校生がいて、高校卒業を目指すということが大きな目的です。費用は月1万5000円で、支払いが難しい方には要相談ということで費用面のケアをされています。定員20名です。広いお寺の集会所を借りて、パソコンや、ゲームなどをそろえながら、来た子が勉強とともにコミュニケーションがとれる環境をそろえていて、その子にどのような教育プログラムをするかというのは個人個人のオーダーメイドでつくっているということです。

大きな特徴としては、そこで見つかった課題が、専門の方がいるので、必要なところにすぐに届いていくということです。実際に学校に相談に行かれるような手だて、家庭への直接的な支援にも入っていけるといことがあります。それとともに、学校の先生と事例検討会、地域の人に対する検討会、あとはスクールソーシャルワーカーの育成などをトータルに行っているので、すごくいい活動で、今せっかくあるこういった活動につながるといいのではないかという事例です。

もう1つは、不登校の子どもの親、もしくは生きづらさを抱えて学校に行きにくい、行ってはいるけれども課題を持っている子どもの親御さんたちが自分たちで立ち上げた多様な学びプロジェクト@せたがやという活動があって、そこは当事者のお母さんたちが活動しているので、とても活発に、スピーディーにいろんな情報を集めながら動いています。彼女たちはやはり子育てや生活があるので、なかなか会って活動することはできないので、LINE、フェイスブック、ブログ、ノートなどを使いながら、必要ときだけ顔の見える集まりをしています。コアなメンバーとともに、その情報をそれぞれが活動の場で発信することで——LINEのオープンチャットを開いていて、そこにまず興味のある人に来てもらって、そこからイベントとか、こういうことをしますよというのをつなげる仕組みを行っている。私なんかはたじたじで、それこそ打っている間にどんどん話が進んで行ってしまいますが、そういうのを管理するのが得意な方や進めていくのに余り抵抗がない方、深めていく方もいる。ママたちは気軽に出たり入ったりしながら情報を集めて緩くつながって、ここはと思ったときに、イベントなどにつなげていくということをしています。

そういう中で、学校に行っていると先生と親ぐらいだけれども、比較的裕福な方はいろんなイベントや塾に行ったり、いろんなところに参加できるけれども、そうではなかったり、親が忙しくてなかなか手をかけられない子が気軽に多様な学びができる場を地域につくっていききたいという活動と、誰でも気軽にいられる、泊まりという居場所、あとはそういった支援をしていきたい人たちのつながるコミュニティーをつくるような場の3本柱で

活動しています。なかなかお勉強の難しい子、あとはいろんな要因で学校に行けない子、いろいろいますが、それは本当に1人1人状況が違うので、用意するのではなく、会ったときにつながる仕組みをつくらうというのがコンセプトです。それはとても細かい作業だし、マッチングが合うかどうかというのはわからないです。それこそやってみないとわからないということの中で、意外と学校が持っている情報をみんな知らない。学校に行っていないお母さんたちだったりすると少し距離があったりするので、そういうところをうまくつなげていきながら、いい関係性を持てる場を社会教育主事の方を中心にお互いを巻き込んだり、巻き込まれたりしていくようなものをつくっていったらいいと思っています。

なので、世田谷区は皆さんいろんな活動をしているので、そういうところを社会教育主事が拾って集めていきながら、それをより活性化して生きたものにしていく。せっかくなつくたいいシステムがあるなら、それが無駄にならないようにどうしたらいいのかというのを使ってほしい本人たちと一緒に考えていくことができるのではないかと思っの御提案です。

○議長 最後の使ってほしい本人と一緒に考えるという、子どもの視点から、これはもう少しこうすれば使い勝手がいいとかいう意見は当然出やすい。大人では気づかない何かがあるかもしれない。そういう意味では、子ども・若者も一緒に参加、参画というところも大事ですよ。一緒に考える。

○委員 みんなつながりたいという気はあるけれども、いろんな心配や、どうやったらいいのかなど、少しずつうまくいかないところを行政や、つなぎ役の社会教育主事が担っていければいいと思います。社会教育主事の何とかさんというような気軽な関係性をつくっていけるようなことがあるといいかなと。

○委員 つながるといって言えば、例えば学校は学校で情報を持っているし、地域には民生委員がいらっしゃって、その方たちは、あそこのお宅で広い空き家があるから活用できる、お寺の集会室は週1回だったら借りられるとかというのは多分情報としてお持ちになっているかもしれないけれども、教育行政には話がこなかつたりするケースもあると思います。あくまで教育委員会では学校施設を中心とした施設の管理はできるかもしれないけれども、例えばまちづくりセンター、社会福祉協議会とか、福祉のほうに行くとやはり遠くなっていくというか、それをもっと踏み込んで、あくまで区民のためにといいのでいくと、それこそコーディネートで、1回そこで情報を集約をするためには教育という垣根を取っ払う、もしくは横断的にやる権限を持つべき、もしくは持ったほうがいいので

はないかということ提言することはいいと思います。

○議長 行政の縦割りを横断的につなげていけるような役割、立ち回り。本来社会教育主事は行政の中で割とフリーな位置に立ちやすく、動きやすいはず。そういうのをよくハブと言ったりします。自転車の車輪の真ん中から細かく支柱が出ていますよね。その中心部分を通して違うところにも行けるというハブというイメージでしょうか。いろんなところにつながっていくために一旦ハブになっていく。すると、ただ待つだけでなく、つなげていく。

○委員 先ほどのネットでつながる話で、パソコンがないからできない、もしくはパソコンを使うことに対してアレルギー、拒否反応がある親も、例えば学校カフェに1台置いて、若い人と一緒に使うような企画を設けてみるとか、それこそカフェということで気軽に参加した中でこういうのもありますよとリーダーシップをとることもできるのではないかと。また、単にカフェだけではなく、保護者がつながる企画を提案してみるというのも社会教育指導員、社会教育主事がコーディネートする1つの役割という気もします。

○議長 そういう意味では、カフェという空間はいろんな掛け算、足し算をすることができます。カフェ掛ける学習支援、カフェ掛ける遊び、いろんなことがプラスできます。

○委員 eラーニングは、1回アクセスしたけれどもやらないというより、全然アクセスしない感じですか。

○委員 実際には6月にスタートしたばかりなので、夏休みにどのぐらい活用しているのかなどを今検証しているところで、まだ正確なデータはお話しすることはできない。ただ、何人かに聞くと、家にそういう環境がないという子が割と多かったです。ですので、まずはアクセスするために学校のパソコンルームを開放する。全員にIDが行っているのに、不登校の子にもIDを渡してあって、その中でやっている子もいるし、そうでない子もいるという状態です。

不登校の子には毎週プリントとかを定期的に渡しますが、実際、学習したときのプリントなんかを渡しても、学校に行っていないからわからないとって見ない子がほとんどみたいです。だから、小学校のときのものがあればという要求はありましたが、それを学校が用意するというのが非常に難しかった。でも今回自分がつまずいていたところができるようにシステムとしてはなっているのですが。

○議長 これはほかの区の事例ですが、カフェで、中高生勉強室をやっていて、ほぼマンツーマンに近いですが、大学生のサポーターも入ったりして、自分のペースで勉強ができ

る。大体つまずいている子が来ます。パソコンに1人で向き合っていく、継続するというのは個人の意思が試されるから、例えば誰かと一緒にあのお兄ちゃんに会いに行くぐらいの気持ちで、楽しい時間の延長上の中に学習支援がうまく入り込んでくるという仕掛けもつくれますよね。

○委員 ネットでつながるといことで、eラーニングをベースにしていくと、どうしても学校教育とは離れられないということがあるので、社会教育としては学校教育の部署とのコーディネートとか、関係が必要だと思います。また、つながりを持たない子が非常に多様化していると思います。例えば人との関係はできないけれども、コンピューターでしかつながれないという子どももいますよね。そういう子はeラーニングが得意だと思います。モチベーションがあるかどうかは別にして。そういう子どももいるし、家にパソコンがない子どももいるし、いろんな多様性があるって、それに対してどういうニーズに対してサプライするかということが非常に難しいと思います。

デジタルで、ネットでつながるといのはとても大事だと思いますが、ネットでつながれない子もいる、その子たちをどう支援するかということも1つの大きな課題だと思います。多様性のあるつながりを持たない子どもに対してどういうふうに支援していくかということを考えていくときに、デジタルでいくかアナログでいくか、その2つを考えていけないといけないので、学習支援としてeラーニングはとてもいいと思いますが、もう1つアナログのところでは何とかできないかなというのがあります。

○議長 本質的にアナログなところを全くゼロで生きていくことは不可能。どこかでアナログなところに接続せざるを得ない。デジタル掛けるアナログというのもアイデアとしていいかもしれないですね。入り口はデジタルだけれども、そこからだんだんとアナログのほうにもつながれて、そのおもしろさというものにも開かれていくという仕組みはあってもいいのかもしれない。

○委員 子どもは趣味があるじゃないですか。1つの例ですが、1つのことに非常に興味を持っている発達障害の子というのは結構います。そこへ行ったらとにかく負けないぐらいのものを持っている。人とはつながれないけれども、そのことに関しては物すごくつながりたいというモチベーションが高いというのはありますよね。そういう子どもたちをどう受け入れていくかという視点も必要かなと思います。

○議長 ある意味、物とか事柄に対しては物すごく集中できるという特徴もあるでしょうし、そういう意味では、先ほど委員がおっしゃった子どもによってニーズが細かく違う、

状況も違うということに対して丁寧に応えつつも、仕掛けとしては、その場もいろんなところにつながっているということ、また、未知なニーズに出会ったときは、逆にチャンスで開拓していく、新しいジャンルとコラボレーションすると。

○委員 こちらのほうではいろんなエレメントを準備しておくということもとても大事なことですよね。

○議長 でも、多分大人の予測を超える未知なものというのはこれからもどんどん出てくるでしょうから、それは全部こちらではなくて、子ども・若者の声も聞きながら一緒につくっていく、開拓していくというような視点もあります。

○委員 そういう意味で、さっき申しましたように、学びの先生というのをプールしておいて、必要な子どもとマッチングしていく。例えば魚がすごく好きで、何の魚かを調べたいといったときに、こういうことを知っている人はいますかとネットで声をかけると、結構すぐ来ますよね。ただ、その情報が合っているかどうかとかはあるので、それをすぐとり入れるのはどうかというのはありますが、一定のピンポイントに対する答えを得るのが若い人はとても上手なので、そういう人たちの情報をちゃんと取り入れながら私たちも情報を更新しながらやっていくと、いろんなアナログもデジタルもうまくいくのではないかと思います。

○議長 若い人は若い人でうまく使いこなしているところはあると思います。わからないことがあると、そういうサイトに検索をかけて、こういうことがわからないので教えてくださいませんかという、誰か知らないけれども、世界中の誰かがすぐに答えてくれるという仕組みがもうあるわけで、そういう意味では、何か新しく仕組みをつくっていく際とか、仕組みをそもそも利用する、どうやって活用したらいいかを考える際には若い人に入ってもらわないとだめかもしれないですね。僕らはついていけない。

○委員 その世界は人間がいないですよ。それがとても気になります。

○議長 画面の先には人がいるので、最終的には会ったりする場合があります。

私も学習会を若手の研究者たちと一緒にやっていますが、フェイスブックを使っています。そうすると、フェイスブックを見ましたといって、20～30人来ます。ネットを使って人と会いに行くというのに割と抵抗感がない。若い人だけが来るとも限らないです。デジタルでいける子と、デジタルが人と人とをうまくつないでくれているというところと両方あるとは思いますが。その仕組みをどううまく活用したらいいのか、もっとその可能性や、私たちが知らない仕組みさえもあると思うので。

○委員 会を開催するに当たってみんなの日程を調整するのに、前は幹事が聞いて回っていたのを、「調整さん」とか、「伝助さん」というサイトですぐに調整できたり、知らなければ大変な作業をすぐに終わらせて大切どころが充実できたり、話し合いを深め合うことができる。そういう意味では若い人に教えてもらいながら、アナログの顔の見える人間的なところを深められたらいいなど。社会教育主事にそういう人材のピンポイントな方を見つけてきていただいて……。

○議長 社会教育主事の方には掛け合わせるところまではバックアップしながら、後の中身をどうするかということについては来た方がどんどんアイデアを出して行って、自分たちでつくっていく。だけれども、会わせてすぐに手を放しちゃうと、ばらばらとなってしまうので、そこは丁寧に、継続的に伴走していくというのは社会教育では大事にしているところだと思います。掛け合わせの部分と継続的な支援。コンテンツの中身や仕組みづくりについては、集まった人たちがどんどん発案していけるような。

そうなると、つながれない子どものケアという視点から始まりながらも、もう既に方策の柱2、第三の大人・若者の発掘と顔の見えるネットワークづくりにもオーバーラップしているかと思います。カフェ掛ける学習支援というのが1つ出たかと思いますが、ほかにもどういう形で第三の大人が発掘されるか、そこからインフォーマルなつながりが創出できるかという具体的なアイデアを出していただけるとありがたいと思います。

○委員 「学校に居場所カフェをつくろう！一生きづらさを抱える高校生への寄り添い型支援」という本が出ています。若者支援、ユース支援をしているNPOと、中退者が多く困っていた大阪の西成高校が掛け合わさって、お互いに課題を共有してカフェをつくろうとして始まったと書いてあります。前回は、支援者がつながるための視点のカフェの話でしたが、これは子ども支援型のカフェということで視点が違います。NPOと高校の校長先生との中で話ができたとのことです。

居場所カフェは、学校内の空き室、オープンスペース、図書館などでドリンクやお菓子などを無料で提供しながら、居場所づくりを踏まえた交流、相談、支援を行う場所ということです。ですから、このカフェスタッフは、この人なら相談できるという人間関係をつくるのが求められています。困難を抱える高校生の悩みを聞き、相談を受けることは、忙しい学校の先生の補完的な役割を果たすとともに、親、学校の先生以外の大人と出会う場、変な大人、そんなのありというような大人の人と会うことで生きるストライクゾーンが広がるということです。学校内に異空間をつくること、学校というルールがきちんと確

立されているところに不均質な空間をつくることで、ある意味いいかげんなルールや不完全なサービス、何かがあるけれども何か不足している、そんな中で癒しの場が生まれているということが書かれていました。

子ども食堂がこういった広がりを見せているように、将来を担う子どもや若者の支援には、地域の人や企業、団体からさまざまな寄附や共感を受けられるということもあって、地域交流の場となり、人間の関係性が豊かになるということで、子どもたちだけではなくて、地域の人々の交流の場や活動の場となる関係性が広がっていくということが挙げられていました。

あるシンポジウムで日本大学文理学部の末富先生が基調講演をされ、どんな子どもも普通の子でいられる場所、しみじみと語り合える場所、学校内に学校的でない雰囲気をつくることで固まっている凝りをほぐす、そんなような場所とお話しされていました。

私たちの提案としては、こういったカフェの意味を広く伝えて、集いの場を設けて、集まったメンバーでどう運営していくか話し合い実際にカフェを開催してみる。その際に、居場所カフェをされている方、プロジェクトをされている方たちがいるので、こういった方たちのお話や協力もいただきながら進めていくということがいいと思いました。社会教育主事の方には、段取りのサポートと、開催が定期的で継続的にできるようにサポートしていただくことと、カフェの情報を一般の方が興味を持っていただけるように広げていくこと、特別な事例としてではなく、どこでも開催できるような体制、ネットワークをつかっていってもらえるようなサポート、ネットワーク会議やスタッフやサポートボランティアをしている方たちの勉強会、スキルアップの場を設けるというようなサポートをしていただければと思っています。

地域にもよりますし、学校内に入っていくルートがあるかとか、先生の中に賛成の方もいれば反対の方もいると思いますが、意義を問われた際には、漠然としたものを行政は余り受け入れてくれないけれども、そこで対話が生まれることから見えてくる大事なものが醸造されていくということが本や、講演会で話されていたので、校内につくるのもいいと思って提案させていただきました。

○議長 いろんな中学、高校等で校内に居場所カフェをつくるというのがだんだん広がってきています。最初は学校外からの人間が入ってくるということに対して違和感を覚える先生がいらしても、だんだん生徒が変わっていく。生徒が友達同士でも話せないことをボランティアに来てくれているお兄さん、お姉さん、地域のおじちゃんとかに聞いてもらっ

て、それで気が楽になったとか、横浜では横浜総合高校と田奈高校に居場所カフェがありますが、横浜総合高校の場合は、高校中退の理由として挙げられているものが全てその会話の中に挙がっていたという分析があります。インフォーマルな会話です。ボランティアと話していることをピックアップすると、そこに全てその理由が語られている。そこを聞いてあげることによって踏みとどまれているという話も出ています。

○委員 田無第四中学校とか、西東京の資料をいただいて、学校の中で放課後、例えば、調理室、図書室を活用している、これはとてもいいと思いますが、学校の教育活動の整合性、衛生上の問題でかなりハードルもあると思います。そのためには、私は習志野の秋津地区を見て、学校でもある程度独立したクラブハウスみたいなところを活用するのが理想だと思います。

○委員 若者の活用もとてもいいですが、いただいた資料でT o k y oスクール・コミュニティ・プロジェクトを見て、これだと思いました。この目的の1つは高齢者の活用です。60歳、70歳の人たちは元気がいい。そこを活用しない手はない。私は会議資料2の28ページの最後の表に書きましたが、総合型スポーツクラブの活用と前から言っています。習志野の例を見ますと、これも総合型スポーツクラブを活用しています。クラブハウスのような場所がある学校が、1つの拠点になる。お花、書道、文化的な活動でお年寄りもたくさん入ってきています。いわゆるおじいちゃん、おばあちゃんと孫との関係がいいと思います。T o k y oスクール・コミュニティ・プロジェクトがどう具体化していくのかわかりませんが、これとコラボして何とかそこでできないかなと。お兄さん、お姉さんの活用は年代が近いのでとても大事だと思いますが、おじいちゃん、おばあちゃん、孫の関係もとてもいい。アクティブシニアを何とか活用できないかなと。

○議長 シニアの世代の方と小中学生の関係性というのは、親子の関係性とか、教師、生徒の関係性とは実は質的に大きく違うというのは文化人類学で言われています。冗談関係と言います。すごく緩い関係。先ほどの居場所カフェと同じ感じで人間関係が緩くていろいろと受け入れてくれる、あえて冗談を言っても叱られないような。

○委員 ある意味で客観的に見られるというのもあるし、孫がかわいいという関係もある。だから、温かい関係と少し離れた関係の両方ができるかなというのがありますね。

○議長 それは生まれやすいかもしれないです。どうしても親子、教師、生徒だと規範的關係性になりやすい、そうせざるを得ない部分がある。シニアの世代だとそこから離れることができるので、違った斜めの関係が生まれる。コミュニティハウスやクラブハウス掛

けるシニアというのも1つ立てることができますね。

学校内のコミュニティハウスについては、世田谷区でも計画として幾つかありますよね。

○事務局 学校と同じ敷地の中にまちづくりセンターが入る複合施設があります。今年7月に代沢小学校と代沢まちづくりセンターが、次に松原小学校が検討されているというのがあります。ただ、それが今現在、東京都のスクール・コミュニティ・プロジェクトとマッチングしているかというところ、そういう話は来ていないという情報は入っています。

○委員 高齢者のことについては、今、高齢者に対して子どもたちが関係をつくれるのかというのは疑問に思うところがあります。叱られるとか、そういう関係しかつけれない場合がある。でも、選択肢がいろいろあっていいと思います。

子どもが学校に行けないという話に関して言うと、学校には行かせません、学校ではないところで学ばすと最近聞きます。学校は自由がない。学校が変わる必要もあるかなというのは感じています。施設を貸すだけでも変わることにもなると思いますが、いろんな学び方があるということ認めていかなければいけない。学校はいろんなことをやってきたので、先ほどのeラーニングもこれ以上余りできないですよ。

○議長 学校、行政が丸抱えでコンテンツやシステムを用意するのは限界ですよ。そういう意味では、当事者も一緒にどんどん増殖していくようにつくることを開拓しながら、そういう発想に変えていかないと追いつかないでしょうし、既にキャパオーバー。

○委員 教科書だけください、学校には行かせません、家で家庭教育しますからと、そういう人も現にいますよね。一方で義務教育なのにというのもある。そこをどうやって関係性をつながれるように持っていくかというところですね。魅力的なイベントがないとだめ。その子どもや親にとっておもしろそうな——私がカフェというアイデアを言ったのは、おいしい食べ物があれば来やすいかなと思って。

○議長 食べ物は結構な威力を発揮する……。

○委員 気軽に来やすいかなと。

○議長 つなげてくれますよね。コミュニケーションも発生しやすいし。

○委員 学校が楽しくて魅力的で、勉強もそうだけれども、それ以外の——私も子どものころ、勉強したくて学校に行っていたわけではなくて、ほかに楽しいことがあったから行っていたので……。

○委員 友達がいるからというのがあったと思いますが、最近はそうでもない。友達とのことでも反対意見を言うと友達がいなくなるからと言って言わなかったり、いろいろです。

表面から見るとすごく活躍している子でも中身は単純ではなかったりするので、先ほどの緩くつながって自分の本音が語られるような相手というのをお兄さん、お姉さんなのか、お年寄りの方なのか、外で見つけられれば確かにつながっていけるのかな、それをどうやって見つけてもらえるかなとは思いますが。

○委員 そうすると、やはり校内にカフェがあると色々な大人が入れかわり立ちかわりしながら、でも、その大人はある一定の安全性が守れてという……。

○議長 子どもは子ども同士の利害関係があって、すごく気遣いをしているところもある。そういう意味では第三の大人や若い人、お兄さん、お姉さんが入ってそこには利害関係がないということが前提としてあれば、もう少し話がしやすくなる。先ほどのシニアの話も、聞いてくれる人じゃないとだめですよ。頭ごなしの人も確かにいます。とにかく最初から厳しく言うみたい。そうではなくて、どの世代もそうだと思いますが、聞いてくれる他者がいることが原則で、誰でもいいというわけでもないところがありますよね。

○委員 時代や、社会の変化によって、私たちの思っている学校で人と触れ合うことで学べることがある、社会性、協調性、我慢をする、本気でぶつかる、そういうものが最近は大分変わってきていると思います。その中で子どもたち、若者たちが関係性の貧困から脱却してほしいなど。社会に出たときに人とかかわることが面倒くさいとか、嫌だというふうにならないように、若いうちから世田谷区で取り組めたらいいと思うので、シニアの活用はとてもいいことだと私は思います。社会に出たら色々な大人がいるということも知らない、自分に都合のいい人とだけつき合っていく、自分はこの人とはかかわりたくないというところは切って、一人でも大丈夫なような気になっている人たちも非常に多いと思うので、そこは本当に生身で触れ合うチャンスが必要だと思います。

受け入れる場合は、自分たちの役割を認識していただいた上で、やっていけばいいのかなと思います。

場所に関しても、学校が難しいのであれば、児童館では児童館まつりなどで食べ物を出している。子どもも、中学生も児童館に行っていますし、午前中は赤ちゃんを連れてお母さんたちの集まりの場になっているので、本当に幅広い年齢層が使える場所になっていると思います。あと、希望丘に新しくできた施設も活用できればいいのかなと。地域の人たちの目に触れるという意味では、学校は入りにくいので、場所も広げてもいいと思います。

○議長 既にある区の公共施設も活用できるところは活用できるわけですね。ユースセンターが3カ所ありますし。

○事務局 お手元に配付させていただいている世田谷ユースキッチン in 松沢ですが、学校カフェ、コミュニティハウスというお話があり、ゼロから立ち上げるとハードルが高いかもしれませんが、現に松沢中学校の中に入って、こういう形でやっていますので、1つモデルとして少しずつ軌道に乗って膨らませていくと、1つの居場所とか多世代交流も含めてそれを担っていくような役割、機能になっていくのではないかなということで、委員のほうからこの説明をしていただいてもいいのかなという気はするので、いかがでしょうか。

○議長 よろしければ。

○委員 松沢中学校の先生に場所の相談をしたところ、家庭科の調理室を使ってくださいというお話があって、この7月から毎月1回土曜日の午後に、待っているばかりではなく、自分で食事がつくれるようになるためのキッチン、子ども食堂の少し先ぐらいの感じのものを立ち上げました。小学校5年生以上18歳までの子を対象に、松沢小学校と松沢中学校にチラシを配布して募集を募って、現在、登録が10名で、大体参加が5～6名ですけれども、そんな形で7月から始めています。

今のところ、中学生が男女1人ずつで2名、あと小学生の男の子が1人と女の子ですけれども、小学生は意外と中学校に来ることが少なく、なおかつ小学校はきれいで、中学校は古く、学校見学に来たときに、この学校は余り行きたくないと言った6年生の女の子は思ったそうです。ところが、こういったキッチンを利用しながら、校長先生や部活終わりの先生が顔を出してくれることですごく親近感を覚えて、私は来年からこの学校に来たいと思いましたと言ってくれるようなことがあったり、あと、料理の腕前は、意外と小さい子がなれていたりすることもあって、年は余り関係なく、その場のその作業を通じて交流が持っています。子ども食堂の時はにぎわいを意識していましたが、ユースキッチンでは料理をつくることで、皆さんへとへとになって、食べるときには静かです。ただ、こういう感じも意外といい。規模が余り大きくがないゆえに子どもから話が出てくることもあったりする。私たちのこれからこうなったらいいという思いと、子どもたちがやっていきたいことは違ってくると思うので、そういったことをすり合わせながらみんなと一緒につくっていくということが楽しめる場としていいと思って、わくわくしながら活動を始めています。

○議長 方策の柱2の講演会・養成講座・ワークショップ、これもまた——カフェは常日ごろからの継続的な場としてインフォーマルな関係の拠点ですが、こういった講演会や養成講座やワークショップというのも大事な仕掛けになってくるわけです。ここについても皆さんのほうから御意見、アイデアをいただけたらと思いますが、いかがでしょうか。こ

こで出てきているのは若い人たちにもどんどん入ってもらい、彼らのアイデア、意見も一緒にやってやろうということも出ていますが、これを掘り下げていけたらと思います。

これも前回、委員から具体的な案として出ています。子ども・若者の当事者の声を聞くことをアドボカシーと言います。だから、子ども・若者、アドボカシーというような講演会やワークショップをやってみたらどうか。そういう子どもや若者の声を聞くということに向けた養成講座につなげてみたらどうか。第三の大人というのは多様であっていいと同時に、子ども・若者の声も聞く。それは別に甘やかかすという意味ではなくて、声を聞くという視点や姿勢を養うような講座につなげていくというアイデアが出ています。

あと、若者を対象に世界的に広がりを見せているSDGsです。これは誰も置き去りにしない社会をつくるということで国連が言っていますし、学校教育のカリキュラムの中にも入ってきていると思いますが、そういった視点で若者を対象に、あるいは子どもも入ってもいいと思いますが、そういったワークショップや講座と講演があってもいいのではないかとアイデアが出ています。

○委員 これはタイムリーで、それこそ若いお勤めの方や、大学生など広く興味を持たれて、打ち方によっては人が集まると思います。考え方はいろいろあると思いますが、テーマとしては、いつも同じ人たちが集まるのではなく、少しずつ違う人たち、だけれども、これから先のことに興味関心があって、何かしたいなと思う人たちに対してのアプローチの切り口にはいいのではないかと思い提案してみました。

○議長 そういう意味では、我々が企画した子どもの貧困のワークショップもなかなかその場には一堂に会さない多様な世代も来ていましたし、また、社会人になって世田谷に引っ越してきて、今ひとり暮らしで、情報難民でという若者も来てくれたり、ああいった仕掛けがあっていいですね。そういう意味では、アイデア、切り口があればそういうのも出していただければ。なるべく具体的なものがあつたほうがいいかもしれません。

SDGsについては、大人が子どもに教えてもらうというのもあってもいい。

○委員 去年、教育推進会議でSDGsをやりましたよね。そのときは固めな感じだったので、世代間でやれるようなものを目指したほうがいいのかなど。

○議長 そこにお菓子とソフトドリンクも置いて、そこでSDGsを語り合う。

○委員 みんなで考えていけるようなのができたらいいですね。

○委員 SDGsはゲーム形式のものや、いろいろなツールはあるし、それを専門としているファシリテーターみたいな方たちもいるので方法はいろいろあると思います。この中

でもどんな切り口でやるかということを決めることは必要ですけれども、わかりやすいテーマかなと思います。

教育推進会議で教育委員のお話がとてもよくて、文化的に深い方たちのお話という切り口で、設けてもいいのではないかなと思います。

○議長 世田谷は非常に魅力的な大人がたくさんいらっしゃる。一芸に秀でた方やいろいろなことに造詣の深い方がいらっしゃるわけで、生かさない手はないですね。

○委員 世田谷区は広いので、1か所で開催しているところから人が集まってくるのも1つだとは思いますが。ただ、地域が幾つか分かれていますよね。その地域の誰々集まれとやったほうがその後につながっていくのではないかなという気がしています。

○議長 世田谷区は各支所に担当の社会教育主事がいます。ですから、そこで担当しながら開催することは可能だと思います。

板橋区はSDGsの集いというのを各地域、市民ベースでやっています。地域の方と一緒にワークショップを開催して、地域から気になる地域の課題を出してもらって、それを集約して、SDGsの市民ベースのこういう板橋になってほしいというメッセージを区長に出しています。それは生涯学習センターの社会教育主事が事務局に1人いて、バックアップしながらやっています。世田谷区は各支所にいらっしゃいますし、それにプラス社会教育指導員もいるので、やり方次第だと思います。

○委員 世田谷区はSDGsの推進担当課はどこですか。教育ですか。

○事務局 17の目標がありますから、特別決まった担当課というのはいないです。

○委員 この前やりましたSDGsのシンポジウムはどこが開催しているのですか。

○事務局 教育委員会主催です。

○議長 逆に言うと、社会教育というのはありとあらゆる地域課題や地球的課題も含めたグローバルな課題も扱っていくので講座、ワークショップを開催して、行政も福祉領域、児童福祉領域など教育とはまた異なるところとも連携をする1つのきっかけとする。

○委員 SDGsを1つの幹として。それもいいですね。

○委員 世田谷全体はもちろんですが、地域によっても少しずつ違いがあると思います。ですから、いろいろな人材の発掘にもなると思います。接点にもなる、交流にもなると思うので、ぜひ支所ごとのいろいろな試みはあっていいのではないかなと。周知、PR、広報もあわせてしていかないといけないと思いますので、それを行政がある程度コーディネートやバックアップしていただくという部分と、民間の方たちで多様な接点を設けていくとい

う両面が必要ではないかと。その全体のコーディネートをしていていただくのを行政の方々にお願いしたいです。

○議長 行政支援、そして民間の持っているノウハウ、それと子ども・若者、当事者目線のアイデア、この3つを掛け合わせていくということですね。

○委員 地域ごとに見ていくと、第三者になれる若者がすぼっと抜けている地域が多いと思います。第三の若者をどういうふうに見つけていったらいいのかが課題で、それをどうやってつなげて、どういうイベントがいいかというのが1つ。

あと、子どもの様子を知るというところで小学校は放課後にBOPがあるので、先生とは違う大学生や主婦が出入りするところで子どもたちが、おうちでこういうことがあってねということぼろっと言う場所はあるのかなと。中学生はSTEPをカフェにして、大学生、主婦が小学校のBOPのように入って、そこでぼろっと言えるようなところが、あれば関係性の糸が太くなったりしていくのかなと。自分の思いを言えない、本当に仲間が固まっているので、その輪をどうほぐしてあげたらいいのか。その場所が変わったときに大人たちでまた固まってしまうとそこに入れないので、きちんとした輪ではなく、いつも変わって、柔軟性があるような場の提供も考えていかなければいけないと思いました。

○委員 希望丘に若者の支援センターができて、子どもたちに大変好まれて活用されているという話を聞きます。活用されるということは居心地がいい部分があるのだろうと思いますので、そういった施設の充実、増設もいいと思います。

○議長 今のところ、月間6000人ぐらい利用していると聞いています。だから1日平均して200人すごいです。そこが1つのハブになって、子どもたちがそこをステップにしていろんな活動の場にも行けるようになっていくといいですね。

○委員 学習室はかなり利用されているという話も聞きますので、そういうのはヒントにできることだろうなと。それだけ好まれているということはとてもいいことだと思いますので、少なくともそこに来ている子たちは居場所があるわけですから、そういう場所の充実はさらにいいと思います。

○議長 その職員の話を伺うと、多様な子どもが来ている。当初はもう少し時間がかかると思ったら、職員に実はと話してくる子どもが多いと言っていました。そういう子どもたちの声をキャッチして、なおかつほかの場とも一緒にしていかないと、多分あそこだけではいっぱいいっぱいになるのも目に見えているという感じです。

○吉岡委員 今日いただいたチラシの希望丘の地域体育館のことをおっしゃっているのか

しら。

○議長 アップス、希望丘青少年交流センターですね。希望丘地域体育館……。

○委員 体育館もありますよね。

○委員 複合施設になっていますので、アップスはそのうちの一部です。

○委員 いろんな施設がついていますよね。体育館もあるし、そういうお部屋もあるし。

だからきっと行きやすいのかな。いろんなことで使われている。

○委員 ここをつくる時、若者の意見をすごく取り入れているので、若者が行きやすいのかなというところはありますね。

○事務局 アップスの話もありますが、今度、10月27日に若者支援シンポジウムが開催されます。これは第27期でもお話があったかと思いますが、若者と咲かせるネットワーク・せたがやという団体と区の若者支援担当課が共催してやっている事業ですが、そこにも何十という活動者、個人から団体からいらっしゃっていますので、ぜひお時間があればそういうところにも参加していただくというのも今後の参考になってくると思っていますので、お時間があれば、よろしく願いいたします。

○議長 では、そろそろ時間が来ましたので、議題のその他に行きたいと思います。事務局から報告があるようですので、お願いします。

○事務局 事業報告になります。8月25日、多摩川の河川敷でアドベンチャーin多摩川いかだ下り大会を開催させていただきました。4名の社会教育委員の方に審査員をお願いしていた関係もございますので、事業内容及び結果を御報告させていただきます。

区内小学生、中学生による手づくりのいかだでの川下りレースでございまして、参加チームが59チーム、小学生56チーム、中学生3チーム、参加者が275名、協力者、来賓の方が約400名来ていただき、無事大会を開催することができましたことを御報告いたします。御協力ありがとうございました。

○議長 ありがとうございます。委員の皆様からもよろしいでしょうか。

では、次回の日程調整ですが、1月で調整させていただいてよろしいでしょうか。

(日程調整)

○議長 では、以上で本日の会議は終わりにしたいと思います。どうもありがとうございました。